

論文の要旨

論文題目 二十年代中国文芸批評論 - 郭沫若・成仿吾・茅盾
氏名 中井政喜
学位 博士（文学）
授与年月日 平成 16 年 7 月 30 日

【本論文の目的】

中国近代の知識人・文学者が、当時の状況の中でどのような課題をもって自らの文学活動を行ったのか。この点を追究するために、1920年代における文学者三人の文芸批評論を取りあげ、その内容を検討し、その変容・深化の軌跡を跡づけた。その三人の文学者は、郭沫若（1892 - 1978）、成仿吾（1897 - 1984）、茅盾（1896 - 1981）である。

彼らが見た世界像と中国社会像はそれぞれに異なり、それに基づく自らの態度と対処法も違っていた。しかしながら彼らは二十年代中国の困窮する旧社会、軍閥の支配と帝国主義の侵略を目の前にして、濃淡はあれ、何らかの形で、同じように中国の変革を願望した。しかしそのために依拠すべきところを見出すのが困難であった。

また三人は同じく中国の滅亡という危機意識を持ちながら、文学に対するそれぞれの基本的態度が異なっていた。創造社の中心成員であった郭沫若と成仿吾は、自我の表現の重視の立場をとった。それに対して茅盾は「人生のための文学」を主張した。自我の表現の重視に立脚したとき、そこでは中国の社会的窮状があるために、創作と作用の間の問題を解明することが必要になった。それは同時に、内心の要求・自我の表現（創作）と、功利・宣伝（作用）がいかに関連するかという問題であった。茅盾の「人生のための文学」という点から言えば、中国の社会的な或いは文学的現実において、いま必要な文学は何か、という模索がなされた。またそこには、社会的或いは文学的現実の要求に応えようとする「人生のための文学」は、作家の内心の要求といかに関連するのかという課題があった。二十年代の前半、彼ら三人の文学者はそれぞれの課題に対する認識と考察を深めていった。

1920年代が進行するにつれて、1917年のロシア革命の影響が中国に浸透しはじめ、中国知識人は中国変革の道をロシア革命の方向に探求し始める。1924年頃から、郭沫若は河上肇の著作『社会組織と社会革命に関する若干の考察』（弘文堂書房、1922・12・5）の翻訳をとおして、マルクス主義を学び、受容した。その場合、郭沫若はそれ以前の自らの小ブルジョア知識人（小資産階級知識人）としての個性（自我）を全否定し、切り捨て、

1926年、国民革命の行動に参加する。茅盾は1925年、ソ連邦のボグダーノフに基づいてマルクス主義文芸理論を紹介し、理念として考察した。被抑圧階級のための文学、理念として提起された被抑圧階級のための文学を、目指そうとする。

1924年、第一次国共合作（国民党と中国共産党の合作）が成立するとともに、国民革命の気運が高まる。1925年の五・三〇事件をへて、1926年、彼ら三人の文学者はそれぞれの形で国民革命に参加した。しかし1927年4月12日、蒋介石が反共クーデターを起こし、7月、武漢国民政府が崩壊して、国民革命は挫折する。彼らは再び、中国変革の道筋、自らの生き方、自らの文学の在り方を問い直さなければならなかった。そうしたときに、マルクス主義文芸理論をいかに受容し、中国の現実がいかに適用するかという問題が、改めて彼らの面前に出現する。1920年代半ば頃から、彼らはそれぞれの形でマルクス主義、或いはマルクス主義文芸理論と接触してきた。1927年歴史の転換期以後において、すなわち三人が中国変革の挫折を深刻に体験した以後において、彼らはそれぞれの中国の現実・文学界の現状認識に基づき、マルクス主義文芸理論をいかに適用するのか、という問題に直面した。その問題に対して、彼らは二十年代前半から深化させてきたそれぞれの、文芸観と思想の質をもって直面したと言える。

そのため1928年以降、熾烈な革命文学論争が行われた。第三期創造社（成仿吾、郭沫若、および若手の理論家李初梨、馮乃超等）、太陽社（蔣光慈、錢杏邨等）はマルクス主義文芸理論に基づく「革命文学」を唱導した。五四期以来の新文学を全否定し、当時の時代の状況に適合する革命文学を唱える。1928年始め頃から、魯迅、周作人等が、後には茅盾が、革命文学派の厳しい批判の対象となった。

1920年代中頃からの、マルクス主義文芸理論をいかに受容するか、という苦闘の中で、その過程は三人三様であった。また革命文学論争をへての、その受容の在り方、その後の適用の模索もそれぞれ異なった。

巨大な困難に立ち向かった中国知識人の苦闘を、郭沫若、成仿吾、茅盾の三人における文芸批評論の側面から見てみた。

【本論文の構成と要約】

第一章では、1920年代初めからの、創造と作用に関する郭沫若の探索の軌跡をたどる。郭沫若は文学における創造と作用を二元的な関係としてとらえた。そこから、両者の社会的連関・内的連関を明らかにすることをつうじて、中国変革を志向する変革者としての立場から、両者の矛盾を解いていく。また文学自身の問題として、すなわち文学の本質という面から接近して、自我の表現の重視（唯美・ロマンティズム）と社会的作用（功利・

リアリズム)の対立する問題を、文学が発生する時間的後先の問題、文学の方法上の差異の問題として、解明した。また1926年、革命と文学の関係について郭沫若は、その特徴が以下の点にあるとする。革命文学は前代の文学との継承を断ち切り、その時代の状況に規定される。この考え方が、1928年頃から、革命文学を主張する第三期創造社成員に影響を与えた。

第二章では、郭沫若がマルクス主義を信奉する転機となる『社会組織と社会革命に関する若干の考察』(河上肇著)の翻訳をとりあげる。1924年、この翻訳をつうじて郭沫若はマルクス主義の基本的理論を学んだ。それと同時に、世界情勢の中におかれた中国の現況に立って、河上肇の、時機尚早の社会革命は必ず失敗に終わるという考えに反対した。郭沫若は、中国の現政府を打倒する早期の政治革命の必要性を説き、そのもとでの社会革命の実現を主張した。また同時に、郭沫若が、マルクス主義文芸理論の基礎として、その前提として、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』から無形のうちに受容した内容があった。それは、資本主義社会と次代の社会主義社会との間の、文化的思想的断絶の関係であった。それが郭沫若の革命文学論における基礎の一つとなった可能性を推測した。

第三章では、成仿吾の文芸批評論についてその変容の軌跡をたどる。「新文学之使命」(1923・5・9)において、成仿吾は新文学の三つの使命、すなわち時代に対する使命、国語に対する使命、文学自身に対する使命、をあげる。成仿吾は、文学が成立する時点において使命をもつことを認め、そしてこの三つの使命が不即不離の形で併存することを承認した。その結果、第三の文学自身の使命は、「芸術のための芸術」を擁護する役目を果たすこととなった。また、第一の時代に対する使命は、「良心の戦士」としての倫理的な態度を主たる内容とするもので、是非(善悪)を転倒する文学研究会等に対する非難に矮小化していった。

成仿吾の文芸批評論の変容は、国民革命の進展を推進力とし、概念の内容を漸次変容させ、社会化していくことによる、接ぎ木的发展の姿を示す。こうした量的変化は、「従文学革命到革命文学」(1927・11・23)で質的变化を遂げる。この論文は、1928年頃から始まる革命文学の唱導に大きな影響を与えた。その革命文学の内容は、郭沫若の論理(前代の文学との継承関係を断ち切り、その時代の状況に規定されるという考え方)の枠内にあるものであった。

第四章では、茅盾の文芸批評論を取りあげる。1919年頃から1924年頃にかけて、茅盾は、旧社会旧文化改革のための人生の文学を主軸として、ある時には自然主義を主張し、ある時には新ロマン主義(ロマン・ロランを代表とする)を主張した。この間、自然主義と新ロマン主義という両者の文学思潮(創作方法)が、この主軸のうえに交互に現れる。この

交互に現れる波動を推進する動力は、中国の現実に対する茅盾の認識の深化と、それに基づく具体的方策の考察である。こうした現実認識と考察自体が深化しつつ、二つの波動の現実化を規定した。

1923 年末頃から、国民革命の気運が高まりはじめ、雑誌『中国青年』の影響を受けて、茅盾は積極的な作用をもつ文学を主張する。それは当初、新ロマン主義の文学を念頭においたところより、ロマン・ロランに対する厳しい批判に転ずる。1925 年において茅盾は、マルクス主義文芸理論（ボグダーノフの論文）に基づき、ソ連邦の無産階級文学論を紹介し考察する。この場合、中国の現実と中国文学界の現状を分析・認識したうえでの無産階級文学の主張ではなく、むしろ理念としての理論・理想に従って、それを高唱した側面を免れない。それは「止揚」（カッコ付きの）の過程と言える。茅盾の文学における主軸は、旧社会旧文化の改革を目指す人生のための文学から進んで、国民革命の気運が高まる 1923 年末頃から、国民革命を支持する人生のための文学に進展し、さらには 1925 年、被抑圧階級の人生のための文学に「止揚」された。

しかし 1927 年の国民革命の挫折をへて、茅盾は中国変革の前途に対して深い悲観と失意に陥り、改めて中国革命の道筋を模索しなけりならなかつた。茅盾にとって、中国の現実を改めて量り直すことが必要であつた。量り直した現実に基づき、中国変革を、中国の無産階級革命文学の在り方を、改めて追究しようとした。そのとき従来からの茅盾の文学における主軸は、被抑圧階級の人生のための文学へと、初めて本来の意味での止揚の道に進み入つたと言える。その場合、一方では世界文学の歴史の中から新しい写実主義が大きな潮流となりつつあることを確認した（『西洋文学通論』、1930・8）。他方において、革命文学（1928 年から 1930 年にかけて出現した）に対する批判に基づいて、中国の現実に根づいた、中国の文学界の現状認識を根拠とする無産階級革命文学（新しい写実主義による）の追究がなされた。

1930 年代初め頃以降、茅盾は当時の文学界の状況における旧写実主義文学の価値を評価した。それとともに新しい写実主義による、被抑圧階級の人生のための文学を建設するために、具体的な作品批評、無名の雑誌や新人の作品紹介・評価等の手間と時間のかかる具体的な作業を選択して行おうとした。

以上のような内容を検証することを、本論文は目指した。